

## あ と が き

Avestici et Pahlavici Bibliothecae Universitatis Hafniensis Vols. I—III の複写刊行である。Rask と Westergaard の蒐集したこの写本の刊行は1912年8月アテネの International Congress of Orientalists でその重要性を決議されているし、その限りではクリステンセン教授独自の業績であるとはいえないかもしれない。しかしそれぞれ 1931, 32, 34, 34, 36, 36 (以上はいずれもクリステンセン教授の Introduction 付き。以下はボル教授の Introduction 付きなるも編集者は依然としてク教授) 37, 38, 39, 41, 42, 44 と着実な歩度をもって刊行されてきたことは、編集に人を得てはじめて可能のことであった。不朽の功績と称して少しも過言でない。その著した多くの論策が異論の余地を残していることも事実である。げんに筆者によって、Les Kayanides における教授の見解に小さな反論も試みられており (本誌 No. 6, p. 6 ff.), The Būndahishn... ed. by T. D. Anklesaria, t. p. 231<sub>14</sub>—232<sub>1</sub> に対する筆者の詩形再構は Heltedigtning og Fortællingslitteratur... p. 34 や Les Gestes des rois... p. 49 における教授の読みかたに対する反論ともなる (言語研究 Nos. 26/27, p. 94)。しかしこれらは極めて一部分に対するもので、却って教授の大を反顕するばかりである。教授の見解が支持されぬ日が到来しても、その論書はイラン学史とともに残るであろうし、かかる日にも尚お燦たる光芒を放つもの——それこそ、この複写本刊行の偉業である。

## 註

- 1) ソロアストラ教というのはザラスシュトラ (Zarathuštra) の原始教義が他の信仰と合採した形態をさし、これに対し原始教義、すなわち、かれによって改革されたままの教義は特に区別してザラスシュトラ教とよばれている。このほかにも多くの註を意図していたが紙数の都合上不本意ながら全部割愛した。

## あ と が き

- 本号は多彩な顔ぶれで学術誌としての特色を強く印象づけることと思うが、珠玉の雄篇を恵投された執筆者各位のご高情はもとより、多数ご加入の会員諸氏のご協力など、編集部一同感謝の至りにたえない。
- 前号は予定超過10ページ、本号は実に20ページ。会員諸氏への大サービスであるが、それだけでなくさえ容易ならぬご配慮をいただいている足利惇氏会長のご高配は、筆舌にも尽くしがたく、深謝のほかはない。
- このうちは一人でも多くの新会員をご紹介いただけたらとは、編集部一同より会員諸氏への心からのお願いである。
- 印刷は、引きつづき、あぼろん社主伊藤武夫氏をわずらわした。付記して同氏の労を多としたい。
- 次号は明年6月末刊行、書評も加え豪華な執筆陣をもっておめえする予定。ご期待を乞う。

【編集部記】